

子を想う母の祈り 星に願いを！

先週11月1日(金)に、「横田めぐみさんとの再会を誓う同級生の会」代表の池田正樹さんを講師にお招きし、1年生を対象に人権講話を行いました。その様子は、翌日、新潟日報にも掲載されました。

真剣に耳を傾ける1年生の態度がとても立派でした。また、この記事の中でも紹介されている「家族や同級生が頑張っている活動していても解決していないことが悔しい。一日も早く帰国できるといい」という代表生徒のコメントと同様の感想が、事後の振り返りでも多くの生徒から寄せられました。その内容をメールで池田さんにお送りしたところ、「あらためて勇気づけられました」とのお返事をいただきました。

一方、地域や保護者には、メールや荻川まつりでのポスター掲示などで事前に告知をしましたが、一般参加者が3名だったのは、正直残念な思いです。

池田さんは、横田めぐみさんをはじめとする拉致問題解決のために、長年支援活動に精力的に取り組んできた方です。私自身も今回の講演会前から面識がありました。その日の夜、支援者の方との懇親会の席に私も誘っていただいたので、喜んで参加させていただきました。

話題は拉致問題に限らず多岐にわたり、話は尽きることがなく、あっという間に時間が過ぎ、会をお開きにして池田さんと二人で新津駅から新潟駅行きの電車に乗ったのは、夜の23時を回っていました。そこでたまたま同じ車両に乗り合わせた二人の若者に車内で声をかけました。

「高校生？こんな夜遅くに何しに新潟に行くの？」「友達の家泊まりに」と。片方の子は、両耳に派手なピアスをした新津の公立高校の生徒、もう一人は、入学した高校がつまらないと早々に通信制の高校に転籍したという、同じ中学校出身の高校1年生でした。

二人とも、学校ではどちらかというとなんちゃんな方だろうなという雰囲気でしたが、嫌みがなくて愛想がよくフレンドリーで話がおもしろくて、車中での時間つぶしにはもってこいの相手でした。

池田さんが名刺を渡すと、「あ、テレビで見たことあるかも」などと話が盛り上がって楽しいひとときが進んでいったのです。

そして、もう少しで新潟駅に到着という時のことです。片方の子が「でも、めぐみさんはもう生きてないんじゃないんですか？」と言い放ちました。私は、(あ、それは言っちゃいけないことだろ)と咄嗟にまずいという感覚にとらわれましたが、案の定、池田さんの表情が突如こわばり、「その言葉、めぐみさんのお母さんの目の前で言えるのか」とその子を睨みつけたのです。

幸いにも、その直後に電車は新潟駅に到着し、私も池田さんを取りなし、高校生の子を諫めてそれ以上のことにはなりませんでしたが、とても気まずい思いでした。

電車を降りて道すがら、「私が彼らに話しかけたばかりに嫌な思いをさせることになってすみませんでした。でも、池田さんにとっては許せないかもしれませんが、世間一般の人、特に若者の感情としては、あれが普通の捉えなのも事実なんでしょうね。」「こちらこそ感情的になってすみません。そうですよね。だからこそ、私たちが頑張らなくてはならないですよ。」と言って二人で握手をして別れました。

花の金曜日の深夜。新潟駅周辺は、もう少しで日も変わろうとしている時間にもかかわらず、飲み会帰りの酔客でにぎわい、中には奇声を発する者、陽気に肩を組んで歩く者、酔いにまかせて赤信号を無視して横断歩道をわたる集団。三連休を前に身も心も発散して楽しそうな様子の人ばかり。週末の開放的な夜そのものでした。

天を見上げれば、曇り空に邪魔されながらも、わずかに星が輝く夜空。もちろん遙か北朝鮮とも共有しているこの夜空とこれらの星々を、めぐみさんもきっとどこかで見ていてくれるはずだ。そう思いながら、何の具体的な大きな力にもなれない自分自身の無力さと、拉致被害者家族の気持ちを慮ると、目の前の屈託のないある意味能天気な光景を目の当たりにするにつけ、せつなさが募るばかりでした。そして、今の世の中は本当に平和なのだろうか、そしてこれからやって来る未来ははたして明るいのだろうか、と。

奇しくも、めぐみさんと池田さんと私は同い年。めぐみさんのお母さんは、私の母親と同い年。横田さん親子の心情は我が事のようにです。そして残された時間は限られています。希望を忘れず、再会を信じ、星にその願いを込めた秋の夜長でありました。